

ユズエクボ症の原因および防除法の検討

沖 友香・森田泰彰・山下翔人*・竹内繁治

Cause and disinfestation methods of postharvest disease 'the collapse symptom of the peel like dimple' of Yuzu (*Citrus junos* Sied. ex Tanaka).

Tomoka OKI, Yasuaki MORITA, Shouto YAMASHITA* and Shigeharu TAKEUCHI

要 約

高知県内のユズ産地では貯蔵中に“エクボ症”と呼ばれる果皮の陥没障害が発生し、問題となっている。原因を調査したところ、障害部位からカンキツ炭そ病の原因菌である *Colletotrichum* 属菌が分離され、接種試験により病徴が再現された。薬剤散布による防除効果を検討したところ、農薬の登録内容にかかわらず多数回薬剤散布した区において、本病の発生が抑えられた。

キーワード: ユズ, 炭そ病, 貯蔵病害, エクボ症, 薬剤防除

はじめに

ユズ (*Citrus junos* Sieb ex. Tanaka) は高知県における中山間地域の基幹品目であり、平成27年度の栽培面積は808ha、出荷量11,097tで、全国の50%を超えている¹⁰⁾。果実の収穫は着色前の青玉果と着色後の黄玉果に分けて行われる。黄玉果は10月下旬から11月に収穫し、12月上中旬まで5℃前後で短期間貯蔵して、市場出荷されている。この黄玉果の果実にエクボ症と呼ばれる果皮が陥没して褐変する障害が発生し、問題となっている(図1)。エクボ症は主として貯蔵中に発生し、障害果実は加工仕向けにも回せずに廃棄処分されるうえ、市場出荷後に発症する場合もあり、市場評価を下げる要因にもなっている。また、多発時には樹上での発症もみられ、加工仕向け用果実の品質低下につながっている。エクボ症を呈する果実からは *Colletotrichum* 属菌が高確率で分離されることから、本障害には本菌の関与が強く疑われていた。そこで今回、接種試験等によりエクボ症の原因菌を明らかにするとともに、薬剤による防除対策を検討したので、その結果を報告する。



図1 ユズエクボ症障害果

材料および方法

1. 樹上での接種による病徴再現

1) 供試菌株および供試樹

平成26年11月～12月に、エクボ症を発症したユズ果実から病斑部を含む果皮の切片を切り出し、70%エタノールで表面殺菌した後、PDA培地上に静置し、25℃で1週間程度培養した。発生した糸状菌を新たなPDA培地上に移し、鮭肉色の分生子塊が見られるまで25℃で培養後、単胞子分離して3菌株(菌株名: 09KNM41, 10FKM43, 12NIH12)を得た。これらを高知県農業技術センター果樹試験場(高知市朝倉)のユズ22年生3樹に接種した。

*安芸農業振興センター
2019年7月31日受理